

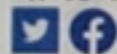
1 第1432号 (昭和63年3月14日 第3種郵便物認可) ©環境新聞社 2021

金曜日発行 **週刊**

- 目 日常的かかり増し経費は報酬増分で… 2面
- 目 地域主導で助け合いの仕組みを…………… 3面
- 目 330円の答送サービスが好評…………… 3面
- 目 ……買引上げ助成の低額コースを新設… 7面

シルバー新報

発行所：環境新聞社 東京都新宿区四谷 3-1-3 (第一富澤ビル) 電話 03 (3359) 5372
大阪市中央区久太郎町 3-1-15 (メビウスビル) 電話 06 (6252) 5895



2021年(令和3年)
1月8日
(金曜日)

介護の文化を創る専門紙
年間購読料 21,000円 (税別)

株式会社カラース代表取締役

田尻 久美子 氏(1)

痛い。指先が腫れる」と悩んでいました。あちこち通院したのち、膠原病によるレイノー現象であること、強皮症を患っていることがわかりました。当時、私は短大生。「手の病気」くらいに受け止めていました。

その後、母は呼吸の苦しさや体のあちこちの痛み、辛さを訴えるようになり、いつの間にか大病院に入院し、体調が悪くなること入院を繰り返すようになり、ステロイド治療の副作用で顔がパンパンに腫れる「ムーンフェイス」になり、同じく副作用で糖尿病を患い、自宅でインスリンの自己注射をしていました。そのうちに呼吸の苦しさが増すと、自宅に在宅酸

さを吐露していました。経験がなく想像力に乏しい私は、「大丈夫？」と適当な相づちしか返していませんでした。「体がしんどい」とか「息が切れる、歩けない」など訴えたときも同じです。「大丈夫？」と声はかけるものの、母の言葉の裏側にある不安や悲しさを理解していませんでした。いや、理解しようとしていませんでした。

自分の親が老いること、病むこと、そして亡くなること。今思えばいく当たり前のことですが、しかし、当時20代、IT企業に就職し、仕事や友人との時間が楽しくて仕方ない私にとっては、全く現実味のないことでした。

いつだったか母が「50歳の誕生日を迎えるのが目標」と言ったことがあります。自分が長く生きられないかもしれないという自覚があったのでしよう。母の気持ちに寄り添えなかった自分が今でも情けなくなります。母の死後、後悔ばかりが残りました。その後悔はとてつもなく大きくなり、消えませんでした。そして、母にできなかった分、

後悔から介護業界に転身
母に寄り添えなかった自分

にできなかった分、老いや病いで苦しむ人の支えになる仕事がしたいと、28歳で一念発起して介護業界に入りました。

素機器が運びこまれ、肺線維症と診断されました。そして、障害者手帳を所持するようになっていました。情けないことには、私にとっては全て「いつの間にか」の出来事でした。

病状が進行し8年ほどの闘病生活を経たころ、母は呼吸不全から48歳で他界しました。当時、私は24歳。茫然自失でした。

母は、太陽のような人でした。明るく、よくしゃべり、いつも人の輪の中にいました。義父母の世話や介護で大変だった時期も長かったようですが、ママさんバレーやコーラスでストレス発散しながら前向きに生きていました。その母が、義父母の介護を終えた40歳手前から「手が

通院の付き添いや入院時の見舞い、家事の分担などできる範囲で手助けは行っていました。しかし、本来家族が担うべき最も大きな役割を果たしていませんでした。それは、「母の気持ちに寄り添う」といえます。



母がよい「眠れなく」と辛

(プロフィール)

たじり・くみこ 大手通信系IT企業、大手在宅介護企業等を経て、2011年12月に株式会社カラース(東京都大田区)を設立。子どもから高齢者までを事業範囲とし、さまざまなサービスを提供。「多世代共生の地域づくり」を理念とし、地域活動や様々な団体との連携に力を入れている。介護支援専門員、介護福祉士、保険士。

(続く)